

オセアニア[豪州]



1 農畜産業の概況

豪州の農畜産業は、国内総生産（GDP）の2.4%、就業人口の2.5%であり、産業全体に占める割合は高くない（2021/22年度（7月～翌6月））。しかし、同年度の総輸出額に占める農畜産物の割合は11.6%と、輸出産業の中で重要な位置を占めている。

豪州では、国土面積（7億6920万ヘクタール）の約半分に相当する3億6468万ヘクタールが農畜産業に利用され、その大半は牛や羊の放牧地および採草地であり、小麦などを栽培する耕地面積は3165万ヘクタールに過ぎない（21年6月末現在）。

豪州の農業従事者数は、17/18年度以降、4年連続で増加し、20/21年度には33万7663人となったが、21/22年度は30万2720人（前年度比10.3%減）とかなりの程度減少した（表1）。

農畜産業生産額は、2000/01年度以降、おおむね増加傾向で推移しており、21/22年度は877億8903万豪ドル（同22.6%増）と大幅に増加した（図1）。このうち、畜産物の内訳を見ると、牛が153億2141万豪ドル（同13.8%増）、羊・子羊が49億3018万豪ドル（同13.8%増）、羊毛が32億2958万豪ドル（同22.1%増）と大幅に増加した。生乳についても48億7189万豪ドル（同3.9%）とやや増加したことから、その他畜産物を含めた畜産物全体でも347億2182万豪ドル（同11.1%増）とかなりの程度増加した。農作物についても、小麦や大麦、綿などの主要農作物が軒並み増加したことにより、530億6721万豪ドル（同31.5%増）と大幅に増加した。

表1 農場数および農業従事者数の推移

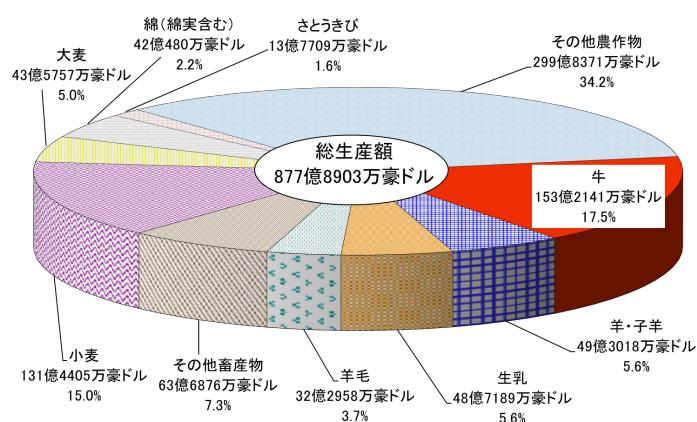
（単位：戸、千人）

区分/年度	2017/18	18/19	19/20	20/21	21/22
農場数	85,483	89,441	87,779	87,402	87,787
農業従事者	329.3	333.7	334.0	337.7	302.7

資料：豪州統計局（ABS）「Agricultural Commodities, Australia」、豪州農業資源経済科学局（ABARES）「Agricultural Commodity Statistics」

注：年度は7月～翌6月。

図1 農畜産業生産額（2021/22年度）



資料：ABARES「Agricultural Commodities」

注1：年度は7月～翌6月。

注2：割合は構成比。

注3：牛および羊・子羊には生体輸出用を含む。

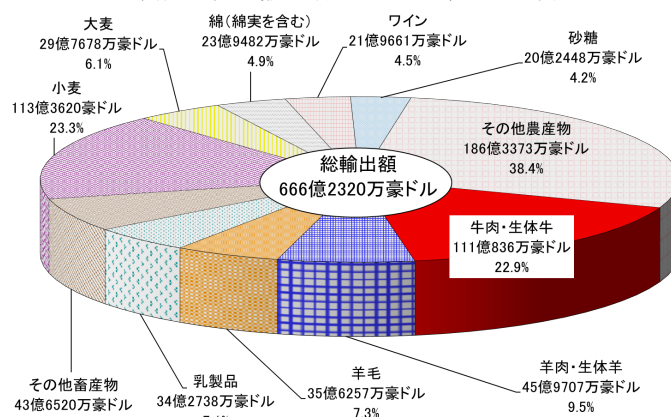


写真1 肉牛の放牧風景（タスマニア州）

2021/22年度の農畜産物総輸出額（FOB^{（注）}）は666億2320万豪ドル（同37.1%増）、うち畜産物輸出額は270億6058万豪ドル（同21.4%増）といずれも大幅に増加した（図2）。畜産物輸出額の内訳を見ると、牛肉・生体牛が111億836万豪ドル（同12.5%増）、羊肉・生体羊が45億9707万豪ドル（同26.4%増）、羊毛が35億6257万豪ドル（同33.8%増）、乳製品が34億2738万豪ドル（同23.9%増）と、いずれも大幅に増加した。

（注）リスク移転時（船上に貨物が置かれた時点）までのコストで、運賃や保険料は含まれない。

図2 農畜産物総輸出額（2021/22年度）



資料：ABARES「Agricultural Commodities」

注1：年度は7月～翌6月。

注2：割合は構成比。

2 畜産の動向

（1）酪農・乳業

豪州の生乳生産は、天候や牧草の生育状況などで大きく変動するとともに、酪農経営は、乳製品の国際市況および為替変動の影響を受けやすいという特徴がある。

豪州の酪農は、放牧を主体とする経営形態であることから、気候条件に恵まれ、牧草の生育が良好なビクトリア（VIC）州を中心に行われてきた。しかし最近では、度重なる干ばつにより放牧環境が悪化したことで、同州でも穀物や乾草など購入飼料の利用も多くなっている。

同国で生産される生乳の約7割がチーズなどの乳製品に加工されている。2000年ごろは、製造される乳製品の約6割が輸出向けであったが、最近では生乳生産量の低迷や人口増による国内需要の増加により4割程度となっている。しかし、依然として輸出志向型の産業である。



写真2 ロータリーパーラーでの搾乳
（南オーストラリア州）

① 主要な政策

生乳の需給管理を目的とした制度・政策は2000年に廃止され、生産者は、収益性や国内外の市場動向を勘案しつつ経営を行っている。デイリー・オーストラリア（DA）は、生乳の販売時に課される生産者課徴金などを財源に、これら生乳生産者のための販売促進や研究開発、市場情報の提供などを一括して行っている。

② 生乳の生産動向

乳用経産牛の飼養頭数は、1999/2000年度以降、飼養戸数の減少などにより減少傾向で推移していたが、2011/12年度には増加に転じた。しかしながら、18/19年度以降、干ばつによる生産コストの上昇や牛の淘汰が進んだことなどから再度減少に転じ、21/22年度も134万頭（同5.0%減）と減少した（表2）。

表2 乳牛飼養頭数などの推移

（単位：千頭、戸、頭）

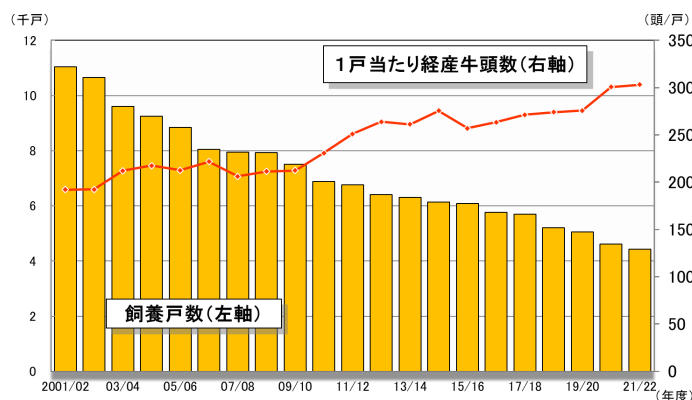
区分／年	2017/18	18/19	19/20	20/21	21/22
乳牛飼養頭数	2,627	2,341	2,361	2,383	2,264
経産牛飼養頭数	1,547	1,428	1,394	1,388	1,340
飼養戸数	5,699	5,213	5,055	4,618	4,420
1戸当たり経産牛頭数	271	274	276	301	303

資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」、Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

注：年度は7月～翌6月。数値は各年度6月末時点。

飼養戸数は、小規模農家の離農や高齢化による廃業などに伴い長期的に減少傾向にあり、21/22年度は4420戸（同4.3%減）と減少した（図3）。一方、同年度の1戸当たり経産牛飼養頭数は、大規模化の進展により、303頭（同0.9%増）と堅調に増加した。

図3 飼養戸数と1戸当たり経産牛頭数の推移

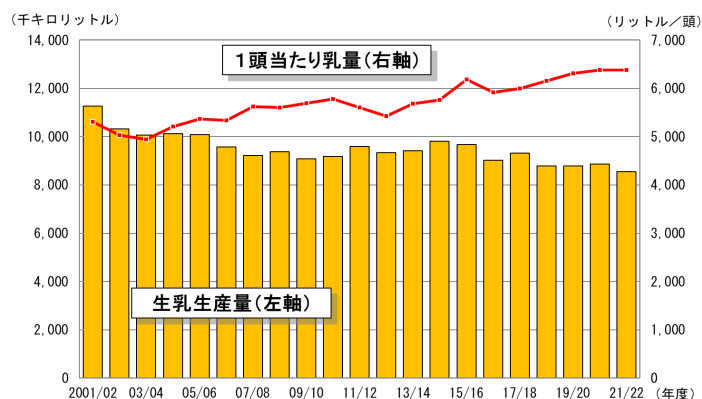


資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」
注：年度は7月～翌6月。数値は各年度6月末時点。

生乳生産量の推移を見ると、1990年代から2000年代初頭までは、ガット・ウルグアイラウンド合意に伴う乳製品輸出拡大への期待などを背景に、増加傾向にあった。しかし、2002/03年ごろからは、干ばつや乳価の動向、恒常的な労働力不足などの影響により、横ばいから緩やかな減少傾向で推移している（図4）。21/22年度は、小規模農家の離農や高齢化による廃業による乳牛飼養頭数の減少などの影響から、855万キロリットル（同3.4%減）とやや減少した。

経産牛1頭当たり乳量については、放牧が主体であることもあり、日本や米国などと比較して少ない。しかし近年は、補助飼料の給与や遺伝的改良などから着実に増加しており、21/22年度は、6386リットル（同0.1%増）と微増した。

図4 生乳生産量と経産牛1頭当たり乳量の推移



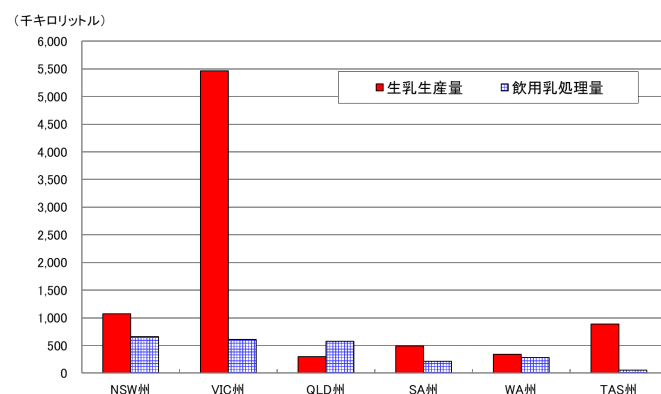
資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」
注：年度は7月～翌6月。

加工用に仕向けられる生乳の割合は、乳製品の輸出拡大に伴って徐々に上昇し、04/05年度には生乳生産量の8割程度を占めた。しかし、生産量の減少などから減少傾向で推移し、21/22年度は72.0%となった。

生乳生産量を州別に見ると、VIC州が全体の63.9%を占め、最大の酪農地域となっている（図5）。ただし、飲用乳向けの生乳処理量は、大消費地であるシドニーを擁するニューサウスウェールズ（NSW）州が最も多い。

このように、生乳生産に占める飲用向けの割合が州により大きく異なるため、乳業ごとに決められる生産者乳価は、飲用向け割合が高い地域とそれ以外の地域とで異なる。

図5 州別生乳生産量（2021/22年度）



資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」
注1：年度は7月～翌6月。
注2：飲用乳処理量は州間移動を含む。
注3：QLD＝クイーンズランド、SA＝南オーストラリア、WA＝西オーストラリア、TAS＝タスマニア。



写真3 専門店でのチーズ販売（南オーストラリア州）

③ 牛乳乳製品の需給動向

2021/22年度の主要乳製品の生産量を見ると、チーズが40万8246トン（同11.3%増）、バターオイルが1万4460トン（同15.9%増）とかなり大きく増加した（表3）。一方、脱脂粉乳が15万473トン（同2.1%減）とわずかに減少したほか、バターが5万8559トン（同15.4%減）とかなり大きく、全粉乳が4万2150トン（同19.7%減）と大幅に、いずれも減少した。

表3 牛乳乳製品生産量の推移

区分/年度	2017/18	18/19	19/20	20/21	21/22
生乳	9,325	8,810	8,797	8,858	8,554
飲用向け	2,493	2,471	2,468	2,424	2,395
加工向け	6,832	6,339	6,329	6,434	6,159
チーズ	377.7	374.3	358.2	366.6	408.2
脱脂粉乳	201.4	192.4	160.2	153.7	150.5
バター	79.7	61.8	63.6	69.2	58.6
全粉乳	84.0	48.5	44.6	52.5	42.2
バターオイル	13.6	12.3	9.6	12.5	14.5

資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

注1：年度は7月～翌6月。

注2：生乳の単位は千キロリットル、乳製品の単位は千トン。

主要乳製品の輸出量を見ると、飲用乳は、常温保存が可能なロングライフ牛乳を中心にアジア向けが好調なことから年々増加しており、21/22年度は28万4484キロリットル（同3.6%増）となった（表4）。その他の主要乳製品は、バターが1万5824トン（同9.5%減）、バターオイルが6723トン（同6.6%減）と減少したものの、チーズが15万6560トン（同2.1%増）とわずかに増加したほか、脱脂粉乳が14万8931トン（同21.2%増）、全粉乳が6万2871トン（同16.0%増）と、いずれも大幅に増加した。これらは、乳製品消費量が増加傾向にある中国などからの強い需要にけん引されている。

表4 牛乳乳製品輸出量の推移

（単位：千キロリットル、千トン）

区分/年度	2017/18	18/19	19/20	20/21	21/22	輸出割合 (21/22)
飲用乳	217.3	235.8	244.1	274.6	284.5	11.9%
チーズ	170.8	165.8	157.6	153.4	156.6	38.3%
脱脂粉乳	156.6	151.2	107.6	122.9	148.9	99.0%
全粉乳	87.6	54.7	46.6	54.2	62.9	149.2%
バター	9.7	13.2	8.0	17.5	15.8	27.0%
バターオイル	6.4	8.1	3.8	7.2	6.7	46.5%

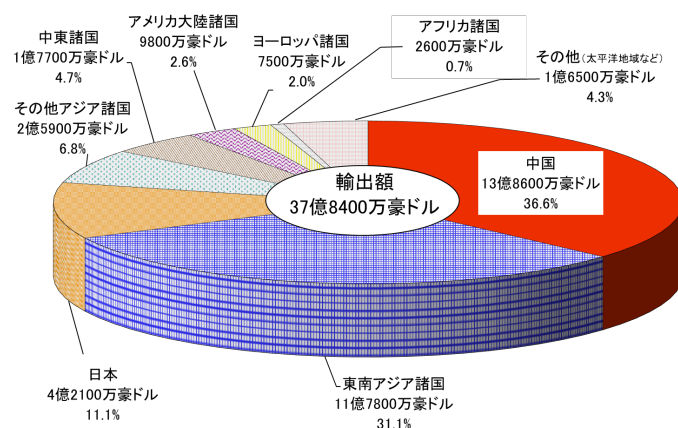
注1：年度は7月～翌6月。

注2：飲用乳の単位は千キロリットル、乳製品の単位は千トン。

注3：全粉乳は、輸入原料から製造した育児用調製粉乳の輸出量も含むため、輸出量が生産量を上回った。

乳製品の輸出額では、アジア向けが全体の85.7%と、圧倒的な割合を占めている（図6）。国別に見ると、14/15年度までは、輸出額ベースで日本が最大の輸出先であったが、15/16年度以降、中国が最大の輸出先となっており、21/22年度では、中国は日本の3倍以上となった（全輸出額に占める割合：中国向け36.6%、日本向け11.1%）。品目別には、チーズは日本が主要輸出先であり、粉乳類（育児用調製粉乳を含む）は、中国、東南アジア諸国などが主要な輸出先となっている。

図6 地域別乳製品輸出額（2021/22年度）



資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

21/22年度の主要乳製品の1人当たり年間消費量は、チーズが15.1キログラム（前年度比12.7%増）とかなり大きく増加したほか、ヨーグルトが9.6キログラム（同1.1%増）とわずかに増加した（表5）。一方、飲用乳は93.0リットル（同1.5%減）、バターは3.3キログラム（同8.3%減）と、いずれも減少した。

表5 1人当たり年間牛乳乳製品消費量の推移

(単位:リットル/人/年、キログラム/人/年)

区分/年度	2017/18	18/19	19/20	20/21	21/22
飲用乳	100.7	98.6	97.0	94.4	93.0
チーズ	13.6	13.5	13.6	13.4	15.1
バター	4.7	4.0	4.1	3.6	3.3
ヨーグルト	9.0	9.5	9.4	9.5	9.6

資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

注1: 年度は7月～翌6月。

注2: 飲用乳の単位はリットル、乳製品の単位はキログラム。

④ 乳価の動向

豪州の酪農・乳業は輸出志向型産業であることから、生産者乳価は乳製品国際市場の影響を強く受ける。

近年は、生乳生産量が伸び悩む中で世界的な乳製品需要の高まりを背景に、一定の乳量を確保したい乳業の思惑から、生産者乳価は上昇傾向にある。2021/22年度は、1リットル当たり56.9豪セント（前年度比8.8%高）と、記録的に高い乳価となった19/20年度（同54.7豪セント）をさらに上回る水準となった（表6）。

表6 生産者乳価の推移

(単位:豪セント/リットル)

年度	2017/18	18/19	19/20	20/21	21/22
生産者乳価	46.0	49.7	54.7	52.3	56.9

資料: Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

注: 年度は7月～翌6月。

(2) 肉牛・牛肉産業

豪州では、数年に一度起こる干ばつや多雨などの気象動向の変化により、肉用牛生産の状況にも大きく影響を受ける傾向にある。このため、近年では気象動向の影響を受けにくく、需要が高まっているフィードロットによる穀物肥育牛の飼養が増えており、放牧による牧草肥育牛との割合は半々程度になってきている。

また豪州の牛肉生産は、一貫して約7割を輸出に仕向ける輸出志向型産業となっている。

一般的に肉用牛は、粗放的な飼養管理が可能のため、乳牛に比べると利用可能な草地の範囲が広いことに加え、熱帯・乾燥地帯などの自然条件の厳しい地域でも、熱帯品種を導入することなどによって飼養が可能となる。こ

のため、内陸部の極端な乾燥地帯を除き、ほぼ豪州全土で、多種多様な品種による牛肉生産が行われている。



写真4 フィードロットの肉牛（クイーンズランド州）

① 主要な政策

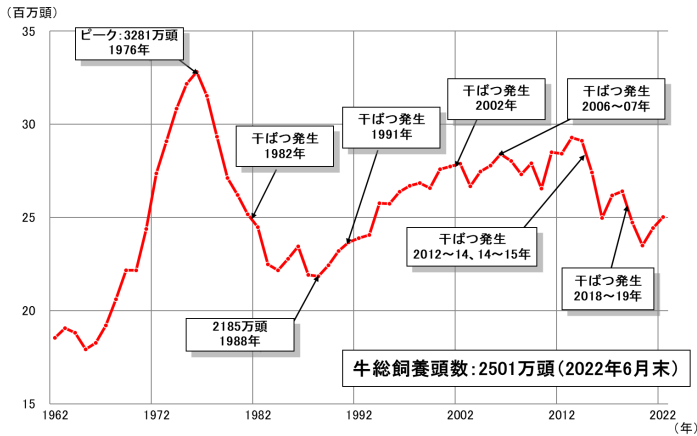
気候変動やバイオセキュリティなどに関する政府の予算措置はあるものの、肉用牛や牛肉の需給管理を目的とした制度・政策は特になく、生産者は、気象動向や国内外の市場動向を勘案しつつ経営を行っている。また、豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）が販売促進、研究開発、市場情報の提供などを、アニマル・ヘルス・オーストラリアが家畜疾病の管理・監督や情報提供などの家畜衛生に関する業務を、全国残留検査（NRS）が残留物検査をそれぞれ行っているが、これらの事業財源の多くは、生体牛の取引（販売）時に課される生産者課徴金によるものである。

② 牛の飼養動向

豪州の牛飼養頭数（乳牛を含む）は、1976年には過去最高の3281万頭を記録して以降反転し、88年には2185万頭と、ピーク時に比べ3分の2まで減少した（図7）。その後は、干ばつによる影響を受けながら、近年では、2013年には2929万頭の高水準を記録したが、12年後半～14年、14～15年に豪州東部で大規模な干ばつが続き、牛の早期出荷や繁殖雌牛の淘汰が進んだことで、飼養頭数はかなりの程度減少した。17年は、天候の回復に伴い牛群再構築が進んだことで増加したが、18年1月から再び干ばつが発生したことで減少に転じ、20年6月末時点では2350万頭

と約30年ぶりの低水準となった。20～21年はラニーニャ現象が継続して発生し、牧草の生育に必要な降雨が続いたことから牛群再構築が進展し、22年6月末時点では、2440万頭と20年比で3.8%増となった（表7）。

図7 牛飼養頭数の長期的推移



資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」、
ABS「Agricultural Commodities」

注1：乳牛を含む。

注2：各年6月末時点。

注3：2017年以降はABSの数値、2016年以前はABARESの数値。

表7 牛飼養頭数の短期的推移

(単位：千頭)

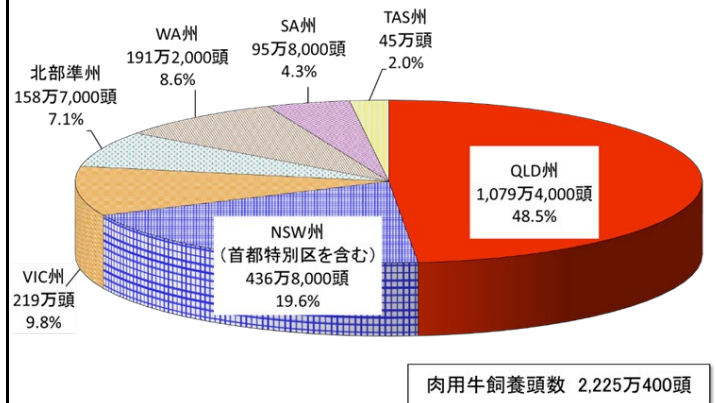
区分/年	2018	19	20	21	22
肉用牛	23,768	22,382	21,142	22,048	22,250
乳用牛	2,627	2,341	2,361	2,383	2,148
合計	26,395	24,723	23,503	24,431	24,398

資料：ABS「Agricultural Commodities」

注：各年6月末時点。

肉用牛飼養頭数を州別に見ると、クイーンズランド(QLD)州が全体の48.5%、ニューサウスウェールズ(NSW)州が19.6%、ビクトリア(VIC)州が9.8%と、東部3州で全体の8割近くを占め、豪州における牛肉供給の根幹を成している（図8）。

図8 州別肉用牛飼養頭数（2022年6月末時点）



資料：ABS「Agricultural Commodity」

③ 牛肉の需給動向

ア 生産動向

牛と畜頭数（子牛を含む）は、19/20年度は869万7000頭となった。その後、ラニーニャ現象の発生により牧草の生育に必要な降雨が続き、牛群再構築が進展したことから減少に転じ、21/22年度は614万8000頭（前年度比7.1%減）となり、約3年継続したラニーニャ現象により牛群再構築が完了したとみられている（表8）。

平均枝肉重量は、と畜頭数に占める穀物肥育牛の割合の増加や、20/21年度以降、多雨により牧草や飼料が潤沢にあったこと、また、肉牛価格が堅調に推移したことから増加傾向で推移し、21/22年度は305.4キログラムとなった。

このことから、平均枝肉重量は増加したものの、と畜頭数の減少によって相殺され、21/22年度の牛肉生産量は187万8000トン（同2.8%減）とわずかに減少した。

表8 牛肉需給の推移

(単位：千頭、千トン、キログラム)

区分/年度	2017/18	18/19	19/20	20/21	21/22
と畜頭数(千頭)	7,913	8,703	8,697	6,621	6,148
生産量(千トン)	2,238	2,352	2,372	1,933	1,878
平均枝肉重量(kg)	297.0	270.2	272.7	291.9	305.4
一人当たり消費量(kg)	23.8	22.8	19.8	20.1	20.5

資料：ABS「Livestock Products, Australia」

ABARES「Agricultural Commodity Statistics」

注1：年度は7月～翌6月。

注2：生産量および一人当たり消費量は枝肉重量ベースで、子牛肉を含む。

注3：と畜頭数には子牛を含む。

イ 輸出動向

牛肉輸出量は、2017/18年度は干ばつの影響に伴う牛肉生産量の増加により、輸出量も増加に転じ、19/20年度は129万100トン（前年度比5.6%増）と3年連続で増加した。しかし20/21年度以降は、多雨により草地環境が改善されたことから、牛群再構築に伴う牛肉生産量の減少を受けて輸出量も減少し、21/22年度は94万200トン（前年度比4.2%減）と2年連続の減少となった。

主要輸出先別に見ると、日本向けは23万400トン（同4.1%減）、中国向けは16万9100トン（同1.4%減）、米国向けは14万400トン（同14.8%減）とそれぞれ減少したものの、MLAが安定した市場だと評価する韓国向けは17万トン（同1.0%増）とわずかに増加している（表9）。中国向けに関しては、20年5月以降、豪中間の政治的緊張を背景に、中国が豪州の10カ所の牛肉処理場からの牛肉輸入停止を勧告している^{（注）}。

（注）2023/24年度に入り、一部の牛肉処理場からの牛肉輸出が解禁された。

表9 牛肉の国別輸出量の推移

（単位：千トン）

国名/年度	2017/18	18/19	19/20	20/21	21/22	輸出シェア (21/22)
日本	308.8	302.5	284.3	240.2	230.4	24.5%
韓国	169.4	188.6	170.2	168.2	170.0	18.1%
中国	140.1	228.0	331.2	171.5	169.1	18.0%
米国	235.0	240.7	240.2	164.8	140.4	14.9%
その他	269.2	261.8	264.3	236.4	230.2	24.5%
合計	1,122.5	1,221.6	1,290.1	981.1	940.2	100.0%

資料：ABARES「Agricultural commodity statistics」

注1：年度は7月～翌6月。

注2：船積重量ベース。

ウ 消費動向

1人当たり食肉消費量（枝肉重量ベース）を見ると、牛肉および羊肉は、小売価格の上昇に伴い軟調に推移している。一方豚肉は、食習慣の変化やアジア系移民の増加を背景に、ほぼ横ばいで推移している。鶏肉については、他畜種と比べて安価であることや消費者の健康志向を受けて堅調に推移しており、2000年代後半以降、

最も消費されている食肉となっている。

2021/22年度は、牛肉が20.5キログラムと前年度比横ばい、羊肉が5.4キログラム（前年比6.1%減）とかなりの程度減少した。一方、豚肉は28.7キログラム（同10.2%増）とかなりの程度増加し、鶏肉は50.2キログラム（同2.7%増）とわずかに増加した（表10）。

表10 1人当たり年間食肉消費量の推移

（単位：キログラム）

区分/年度	2017/18	18/19	19/20	20/21	21/22
牛肉	23.9	22.9	19.9	20.5	20.5
羊肉	7.6	6.2	5.7	5.8	5.4
豚肉	27.5	28.7	27.8	26.0	28.7
鶏肉	47.2	47.5	46.8	48.8	50.2
合計	106.2	105.3	100.1	101.1	104.7

資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」

注1：年度は7月～翌6月。

注2：牛肉には子牛肉を含む。



写真5 精肉店における牛肉販売

④ 生体牛輸出

生体牛輸出は、東南アジア諸国向けの肥育もと牛が中心となっており、中でも全体の過半を占めるインドネシア向けとベトナム向けで全体の約7割を占めるなど、これらの国への輸出の動向に左右される。

インドネシア政府は2016年10月以降、自国の繁殖基盤強化の観点から肥育もと牛5頭につき繁殖用雌牛を1頭輸入することを義務付ける政策を導入している。生体牛の合計輸出頭数について、18年以降は干ばつによる早期出荷などにより大幅に増加し、19年は130万3900頭（前年比15.8%増）となったものの、20年以降は多雨による良好な草地環境に起因する牛群再構築やCOVID-19、為替の影響などを背景に、

インドネシア向けを中心に大幅に減少し、22年は60万頭（同22.3%減）となっている（表11）。また中国向けは、主にニュージーランドから仕向けられていた乳牛に関して、21年4月以降、同国のアニマルウェルフェアに関する規制が厳格化されたことにより^{（注）}、豪州からの代替が進展し、22年は14万700頭（同45.4%増）と大幅に増加している。

（注）海外情報「豪州およびニュージーランドにおける生体牛輸出の現状」の「4. NZにおける生体牛輸出禁止措置の経緯と現状について」も参照されたい。

表11 生体牛の国別輸出頭数の推移

（単位：千頭）

国名/年	2018	19	20	21	22	輸出シェア (22)
インドネシア	599.4	669.9	465.0	409.0	338.5	56.4%
ベトナム	203.3	277.3	297.7	166.2	58.4	9.7%
中国	136.2	158.1	129.6	96.8	140.7	23.4%
イスラエル	60.8	78.1	37.5	28.6	27.5	4.6%
マレーシア	20.8	19.0	24.8	21.8	6.4	1.1%
フィリピン	12.4	18.1	20.9	20.7	7.1	1.2%
日本	14.5	17.9	14.5	11.8	7.7	1.3%
その他	79.0	65.6	58.7	20.8	13.8	2.3%
合計	1,126.4	1,303.9	1,048.8	771.9	600.0	100.0%

資料：DAFF

注：乳牛を含む。

⑤ 肉用牛価格の動向

2021年の肉用牛の家畜市場加重平均価格は、1キログラム当たり842.6豪セント（前年比20.8%高）と大幅に上昇しており、19年以降上昇傾向が続いている（表12）。特に20年に入ってから、牧草の生育に必要な降雨が続き、牛群再構築が進展して牛の需給がひっ迫したことが、価格上昇の要因として挙げられる。

表12 肉牛価格の推移（枝肉換算）

（単位：豪セント/キログラム）

区分/年	2017	2018	2019	2020	2021
若齢牛	547.6	530.0	609.7	816.5	1006.3
肥育牛	495.7	513.9	578.0	692.6	817.4
経産牛	410.7	397.1	482.8	582.9	704.1
加重平均	484.7	480.3	556.8	697.3	842.6

資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」

注1：いずれも主要家畜市場の価格。

注2：肥育牛は生体重500～600キログラム、
経産牛は同400～520キログラム。

写真6 大型の精肉販売店